

# 高岡市立中央図書館本『宇良葉』の研究と翻刻

伊藤伸江・奥田 勲

## 一 『宇良葉』伝本の所在

宗祇の句集『宇良葉』は、現在、知られている伝本が一本のみという特異な句集である。希少な一伝本は、かつて尊経閣文庫に存し、現在は桜井健太郎氏蔵である桜井本であり、この本は昭和十四年に館残翁により尊経閣文庫にて閲覧された際に原本に忠実に写され（館残翁記）、七部謄写版が作られた。これらは現在東大史料編纂所、早大図書館伊地知文庫、金沢市立玉川図書館、京大頼原文庫などに蔵されている。桜井本そのものは、国文学研究資料館マイクロフィルムに収集され、また深井一郎氏による紹介と翻刻<sup>中</sup>、貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』<sup>中</sup>にも翻刻がある。

稿者は、『宇良葉』所収宗祇独吟百韻の研究をすすめていくうちに、長年にわたり、加賀・小松など北陸の連歌資料を調査・研究さ

れている綿拔豊昭氏より、高岡の有力な町人家に伝わる『宇良葉』の一伝本の存在をご教示いただいた。この伝本は、高岡の葉種業者清水家の蔵書であったものである。清水家の蔵書は、平成七年に十五代清水幸司氏により、薬学・医学関係の書物など一括して高岡市立中央図書館に寄贈され、「清水家文書」の名で同図書館の古文獻資料室に存する。また清水家に関しては、綿拔氏による詳細な沿革と歴代の紹介資料<sup>注3</sup>が存する。

清水家の『宇良葉』伝本に関しては、同図書館のHPデジタル古文獻資料中に、墨付第一丁から二丁表の二枚の画像が現在紹介されている。あらためてこの『宇良葉』伝本について、平成三十年九月二十八日に、同図書館にて閲覧・調査をさせていただいた。本論考及び翻刻は、その際の調査に基づき伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

## 二 高岡本『宇良葉』の書誌

高岡市立図書館蔵『宇良葉』（以下、高岡本と称する）は、縦19・

2cm、横14・0cm、緑色表紙、四つ目綴の写本。表紙には打ちつけ

書で「宇良葉」と墨書している。表紙は新しく、料紙は楮紙、墨付

七十九丁、遊紙一枚。江戸後期の書写か。保存状態が大変良く、虫食いも全くない。一面八行書。一句一行。詞書は四文字程度下げて

いる。書写奥書はなく、書写者の情報はないが、末尾の年代と宗祇略伝の部分まで、本文はすべて同筆と思われる。書写に際しては、

秋、冬、末尾の三つの百韻あたりでは誤字の上からの書き直しもあり、

秋、冬、末尾の三つの百韻あたりでは誤字の上からの書き直しもあり、秋の部分などは字がやや乱暴になっているが、総じて非常に丁寧に書写しており、誤写の痕跡、みせけちも少ない。ただ、あるべき

詞書文末の助詞を書きおとす傾向（例えば夏172句、184句、秋331句など数多い）が見られる。

内容は、次のようになっている。

墨付一丁表から十七丁裏 春の発句（句番号1〜147） 計147句

十七丁裏から二十八丁裏 夏の発句（148〜230） 計83句

二十九丁表から四十一丁裏 秋の発句（231〜333） 計103句

四十二丁表から五十三丁表 冬の発句（334〜422） 計89句

五十三丁裏から五十五丁裏 追加の発句（部立の記載はないが、

春の発句十二句（423〜434）、

夏の発句二句（435〜436） 計14句

以上発句436句

五十六丁表から六十二丁裏 春日法楽左抛百韻及び識語

六十三丁表から七十一丁表 夢想百韻前書及び百韻

七十二丁表から七十七丁裏 本式連歌（末尾に「宗祇判」と墨書）

七十八丁表から七十九丁表 後花園院・後土御門院の御代における

年号列記および左記の宗祇句

〔<sup>百五</sup>後柏原院〕文龜二年八十二歳正月一日の夜夢に

年やけさあけの井垣の一夜松

宗祇生没年略記および末尾に左記の句

〔宗祇北国江おもむかれし春の発句

身や今年都をよその春霞

宇良葉本体は七十七丁裏までである。中に朱書、朱引等はないが、

句頭や該当する語句の横に、小字で書き込みがある箇所があり、そ

こからいくらかの情報を得ることができる。また発句群と、左抛百

韻、夢想百韻には庵点はないが、本式連歌には付されている。以

下、こうした書き込みなどの点もたらず情報について、部立順

に、現存する唯一の伝本である桜井本と比較しつつ述べる。但し比

較の基準に桜井本を措定したので、記述に一貫性を欠く点があることを了解されたい。

《春の部》

句数は百四十七句であり、桜井本の句数百五十句に比して三句少ない。桜井本に比して新たに加わった句はなく、桜井本の春の句のうち三句が欠けている。欠部は以下の通り。

① 桜井本句番号(以下番号(桜)と記す) 23番の句と次の句の詞書

23 何かかくちらはにほひしむめの花

梅の発句の中に

② 73(桜)の句

73 花やさくおも影にほふあさかすみ

③ 110(桜)の句

110 見る人に風はをくれよ花さかり

①は、前後の句の内容から、高岡本は子の追善の連歌の発句を書き落としたと判明する。②③共、一つの詞書の後に句が連続して三句、七句とある部分で、目移りによる書き落としの可能性が高い。

句の配列に関しては、33(桜)・34(桜)・35(桜)部分の配列が、高岡本は相違する。

桜井本

草庵にかすみを

33(桜) 霞たつとを山のみや宿のはる

おなし心を

34(桜) うちへて世は春かすみ風もなし

山崎津田新左衛門尉許にて

35(桜) 水はれて山かたかくるかすみかな

高岡本

草庵にして霞を

32 霞たつ遠山のみや宿の花

山崎津田新左衛門尉許にて

33 水はれて山かたかくるかすみ哉

草庵にして霞を

34 打はへて世は春霞風もなし

桜井本で連続している33(桜)・34(桜)だが、高岡本は34を書き落とし、高岡本33の後に再度詞書を記して入れた可能性がある。なお、高岡本には句の脱落があるため、両本の句番号はその分ずれてい

る。  
詞書の補入その他に関して、桜井本129(桜)の前の詞書「夏の暮に森左衛門尉盛家許にて侍し会に」は、129(桜)句の上に貼られた別筆の貼箋に書かれたものであるが、高岡本はこの部分を高岡本126句詞書本文に入れ込んで書いている。さらに、126句の後ろに左注として

「○是迄宗祇法師筆」と、書写者に関する情報を記している。

桜井本

「夏の暮に森左衛門尉盛家許にて侍し会に」(貼箋)

129(桜) うつろふか花に見さりし夕かすみ

高岡本

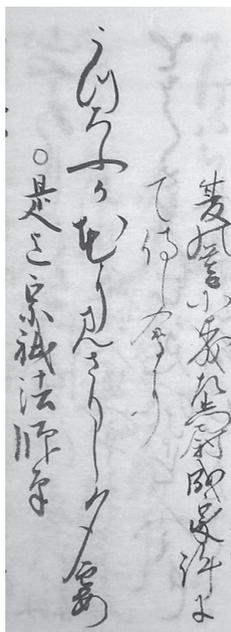
夏の暮に森左衛門尉盛家許に

て侍し会に

126 うつろふか花に見さりし夕霞

○是迄宗祇法師筆

高岡本126句



高岡本の宗祇に関する記述は、桜井本の同箇所には記されていないが、桜井本『宇良葉』には、付紙が三枚ある。藤本了因(一六二六

一七〇四)の極め「種玉庵宗祇／同門弟宗哲 両筆 宇良葉一冊

／奥宗祇名判有之『箕山』、さらに、朝倉茂入(初代または二代、

いずれも生没年未詳、初代ならば寛文二年(一六六二)以前に古筆了佐に師事)の極め「宗祇名判 同付紙二枚／宇良葉一冊旨／所々ノ加筆 真跡 同宿宗哲筆／同外題『辨』、古筆本家の極め「宇良葉 内押紙二ヶ所者連哥師宗長／奥判形者宗祇真蹟『琴山』」である。

桜井本は、国文研写真で見ると、「うつろふか」句(国文研写真番号153末尾に存する、桜井本十二丁表)までと、次の句(同写真番号154冒頭に存する、桜井本十二丁裏)からとは、明らかに別筆である。すなわち桜井本は墨付十二丁表と、同丁裏との間で筆跡が分かれる。桜井本に付された、藤本了因、朝倉茂入の極札には、宗祇・宗哲の書写箇所の情報はないから、はやく両者の執筆範囲を了解した時期があり、それがなんらかの形で伝わっていたのであろうか。

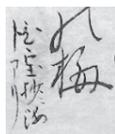
高岡本の記述は、十五丁表の六行目(一丁の冒頭や末尾ではなく途中)に書かれており、桜井本の持つ情報がこのような形で書き込まれたものであろうと推定され、その際には、最初からここまでが宗祇筆との判定も、そのままに諾なわれたのであろう。

その他春の部では、一箇所本文に関しての疑問を注記した部分がある。高岡本の本文「春の梅」に関して、至宝抄を典拠として左記のように疑問を注記している。なおここは桜井本の本文は「春の海」である。

130 山やあらしはなの波たつ春の梅

至宝抄二海  
トアリ

高岡本130句



『至宝抄』は、切れ字「や」の例句として宗祇のこの句を「山やあらし花のなみたつ春の海」と載せている。<sup>注5</sup>

#### 《夏の部》

句数は八十三句であり、桜井本に比して三句少ない。桜井本の句に新たに加わった句はなく、桜井本の夏の句のうち三句が欠けている。欠句は以下の通り。

① 153番(桜)の詞書及び句

種村三河守やとりにて

153 こゑそはなちる山いつら時鳥

② 176(桜)の句

176 卯花の月にさはらは雲もなし

③ 208(桜)の詞書及び句

おなし心を

208 秋かせもそてよりうこく扇かな

②は、春部②③同様、一つの詞書の後に句が連続してある部分の句で、しかも175句も176句も「卯花」ではじまる句であるので、目移りによる書き落としたの可能性が高い。③も、「扇」の句の並ぶ部分で、書き落としたは起こりやすいであろう。

注目すべき異同のある箇所として、まず222(桜)「ゆけはまた扇はかりの風もなし」は、桜井本では「おきはまた扇はかりの風もなし」となり、やや本文の相違が大きい。ただ、類似の形のくずしではなく、誤写の可能性が少ない大きな相違は夏部ではこのみであり、その点に注目すれば、桜井本と高岡本の近さは疑いもない。

次に、補入箇所に着目して高岡本と桜井本を比較した場合、高岡本は、桜井本が補入として印を付して右傍に本文を書くものを、補入ではなく正しく本文中に入れてある。先の春の部で言えば、桜井本がみせけちや補入である箇所でも、高岡本ではそうした痕跡がなく、正しく同一の内容を書写しているものに、19句詞書、43句、58句詞書の例がある。夏部でも、208句は桜井本はみせけちであるが、高岡本は同一内容を正しく書写している。しかし、高岡185(190(桜))を見ると、ここは両本とも補入であり、それぞれやり方が違い、高岡本は非常に広く空白を取っている。

#### 桜井本

190(桜) はなさかぬ竹にもツボム若葉かな

高岡本

185 花さかぬ竹にも ツホム 若は哉

高岡本185句



桜井本を被見して写しているならば、即座に語句は補入できる。高岡本は、一度、一句がきちんと一行をみたすように勘案して空白をあけて写し、しかしその時は空白には何も書き入れられず、後にも片仮名でしか補えなかつた可能性がある。高岡本は、ここがきちんと読み取れない伝本を写しており、後に他本と校合したという可能性が考えられよう。だが漢字のあて方がわかれば、そのように記すであろうから、漢字のあて方がわかる伝本は見ることで、仕方なくわかつた片仮名を書き入れておいた可能性がある。なお、このような、桜井本の書き込みが、漢字仮名のあて方がわからない箇所は他にない。

次に、夏部には、桜井本にない傍書がいくつかあらわれてくる。例えば、高岡本187句(192(桜)、190句(195(桜))は、右肩に「本ノことく」という小さな書き込みが存する。(187句は書き直し部分、190句は表現の不審(を)を言うか。)また、194句(199(桜))に

は、「みする」の右傍に「ウツルカ」と記されている。

187 雲まよひあま風さむき五月哉

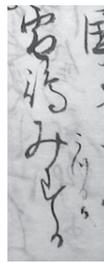
高岡本187句



190 本ノことく  
ふしのみか五月をゆきのしらね哉  
越中国にて万葉の心を思ひて

194 なたてしこに雪嶋みする真砂哉

高岡本194句



《秋の部》  
句数は百二句で、桜井本も同数である。  
句の配列に関しては、桜井本275(桜)、276(桜)句が、高岡本では順序が逆になっている。

桜井本

あさかほを

274(桜) 年のうちはなやあさかほ一盛

275(桜) あさかほも長月かけよはなの露

秋の発句の中に

276(桜) あきの色はかはるもひとつ草葉哉

高岡本

あさかほを

268 年のうちのはなやあさかほ一盛

秋の発句の中に

269 あきの色はかはるもひとつ草葉哉

朝かほを

270 あさかほも長月かけよはなの露

ここに關しては、高岡本が朝顔の句の二句目を書き落とし、それに氣づいて後ろに付け加えたという見方が可能である。

秋の部には本文の相違がいくらか見られる。桜井本と比較した時に、255句「京」(261(桜)「下京」)、256句「月のころ」(262(桜)「ふ月のころ」)は、いずれも桜井本の本文が理解しやすく、一方258句「露やおく」(264(桜)「露やおる」)、278句「心ありて」(284(桜)「心あらて」)は、高岡本により桜井本の本文を訂正できる。その他、303、304、315、316といった、時に連続して現れる本文の相違は、高岡本の方は意味が通らない。

さらに、傍書に關しては、325句、327句にみられる。

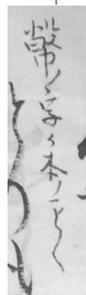
高岡本 325句



高岡本 327句



325句は「幣」の字が不審で「幣」の字が本となく「と注



しており、327句は「明日」に關して、句頭に「明日ノ字本ごとく」、「明日」の左傍に「昨日カ」と傍書する。桜井本は「とりもあへぬ幣は風のみち哉」(331(桜)、「露やしるいつれ昨日のうす紅葉」(333(桜))である。桜井本が「露やしるいつれ昨日のうす紅葉」であることにより、327句の注によつて、高岡本の写した親本は「昨日」の部分で「明日」と書いてあったことが明確にわかり、桜井本を直接写したのではないことがわかる。

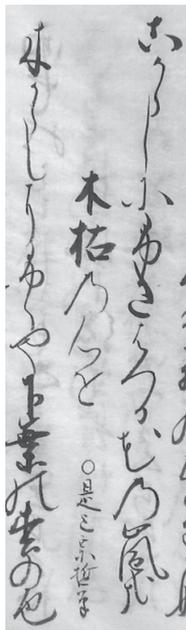
なお、秋の部でも、桜井本のみせかけ部分が、高岡本では普通に書かれている傾向(249、268)、高岡本が詞書最後の助詞を書きおとす傾向(331句)もひきつづき見られる。

## 《冬の部》

句数は八十九句で、桜井本も同数である。

詞書などの補入に関して重要なものとして、高岡本は364句詞書本文にやや小字で「○是迄宗哲筆」と、書写者に関する情報を記している。宗哲は、延徳二年（一四九〇）あたりから宗祇関係の百韻に参加し、大永三年（一五二三）まで生きた（『実隆公記』）宗祇の門弟で、『宇良葉』編纂時に、宗祇に近い位置にいたとしても不思議ではない人物であった。

高岡本364句詞書部分



これ以前に、126句の後ろに左注として「○是迄宗祇法師筆」と記しており、127句から364句詞書「木枯の心を」までが宗哲筆となる。

桜井本を見ると、三十六丁裏が高岡本の364句詞書「木枯の心を」で終わっているが（国文研写真No.178）、三十七丁表になると、「に」の字体の用字などが変化しており、筆跡が違う。やはり高岡本の記述は、親本にあったのかもしれないが、それであっても桜井本の検分

によつて書き込まれたものであろうと推定される。なお、宗祇筆の情報には、一行分の幅を持つて書き込まれているが、宗哲筆の情報には、一行分の補入枠がとられておらず、後からの書き込みであった可能性がある。宗哲筆の情報は宗祇筆の情報ほど強い印象を持たないため伝わりにくかったか。先の185句の「ツホム」の書き入れ方を見ても、桜井本とやや本文の性質の違う親本をまず写し、それに桜井本系統の本から足りない部分を書き加えたという推定も可能であろう。

ついで、頭注、傍書類は、高岡本385、410句に見られる。410句はおそらく詞書「持是院」の「是」の字の不審によるものだが、385句は、桜井本（「水しろき庭は雲の名残哉」、高岡本（「水しろき庭は雲の名残かな」）共に「水しろき」だが、句頭部分に「御本寒カ」とある。この句は、同一句形で『下草』（金子本（初編本））1462にも見られるものだが、「水寒き」とする本文に引かれているか。「水寒き」ではじまる宗祇の句は、秋の部に「水さむき山を氷室の名残かな」（225）、左抛百韻に「水寒き河原に秋の日は暮れて」、『下草』（金子本）に「水さむき谷のふるみち梅開て」<sup>注</sup>など複数存する。ただ、注の位置から「水」を「寒」としている本ということもあるかもしれない。注者の念頭には、敬意をもつて呼ばれる「御本」があることが注意される。



本文の相違としては、390句詞書が、桜井本「神な月に大内京兆の月次発／句すへきよし侍し夜俄に／雪のふりけるを、明かたに思案／の発句さためてかはるへくやなど／申送られしあした」のうち、

高岡本は「かはるへくやなど申送られしあした」がなく、明け方に思い定めた発句であるかのようになっている。いずれも意味は通るが、突然の雪と発句との関係は変わるところである。その他、415句の相違は桜井本で「、」に見える字を「し」としていることで、比較検討できる本文となる。桜井本のみせけち部分が、高岡本では普通に書かれている傾向（353）、詞書最後の助詞を書きおとす傾向（359）句詞書、401詞書、412詞書、422句詞書など）もひきつづき見られる。冬の部の末尾に、桜井本は四季の発句それぞれの句数を記した貼箋があるが、高岡本にはなく、また貼箋の存在を示す記載もない。

#### 《追加の部》

句数は十四句で、桜井本も同数である。

ここは428句が「花程」（桜井本「花種」と、比較検討できる本文を提供していること、429、435と「にして」を「にて」にしているこ

となどが目につく箇所である。

続いて、百韻の部分に關して述べる。百韻に關しては、便宜上、各百韻それぞれに1から100までの番号を付し、説明を加える。高岡本と桜井本を比較した際に、百韻内で、句が入れ替わっていたり、脱落したりした箇所は三百韻ともないので、句番号はずれない。三種の百韻については、百韻単独の伝本があるので、これも比較の対象とした。

#### 《春日左抛百韻の部》

この百韻は、文明八年に詠まれた『春日左抛御前法楽独吟百韻』である。末尾に成立事情を記した識語を持つ。

百韻の部でも、櫻井本と高岡本を比較すると、漢字仮名のあて方は、目立つほどではないがやはり相違する。なおこれは夢想百韻、本式百韻にも共通である。

高岡本は10、26、35、41、42、48、71、75句で桜井本と相違箇所を持つが、この百韻の他伝本との間の校異<sup>キョウイ</sup>に目を転じれば、高岡本の語句は、41句以外は他伝本にはない独自異文である。26、35、48句は、目移りによる脱落、10、75句は誤写であろう。ただ、第26句は「とをしと後の世な おもひそ」（桜井本「とをしと後の世をなおもひそ」）であり、短句であるゆえ字配りに苦慮した点もあるのか、大きめの空白が一句中に残されている。しかし訂正はない。

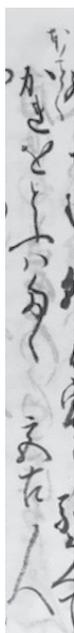
校異として注目されるのは、71句（「袖ぬれて」（高岡本）と「立ぬれて」（桜井本）のみであり（ただし、これも高岡本は独自異文である）、全体として、この百韻においては、高岡本は桜井本に非常に近い。ただ、識語の百韻詠進時年齢部分では、桜井本は五十六歳であるが、高岡本は五十五と記しており、注意される。

### 《夢想百韻の部》

この部分は、延徳二年九月「夢想住吉法楽独吟百韻」であり、夢想の発句を得てから百韻完成までの概略を記した文と、「夢想之連歌」からなる。概略文は、桜井本との間に六箇所程度の校異を持つが特に注目すべき相違はない。

百韻には「本ノことく」の頭注が五箇所付されている（百韻内の番号22・40・47・54・66）。この頭注も、四季の発句の部に付された頭注（例えば夏部187句参照）、発句の部で使われた書写者の字体と似ており、おそらく同筆と考えてよいのではないかと思う。

高岡本夢想百韻54句



高岡本133句詞書中「本」



高岡本夢想百韻47句「本ノことく」



頭注のある句の中で、高岡本22句は「あは」の「は」が読みにくかったゆえの注と思われ（「ハ」の上に「あ」につづけて「は」を書き直している）、47句も「遠」か「を」か迷ったゆえの注であろう（「遠」の部分の端正に「を」と書いている）。67句は、「夕のしらは」という表現が不審であったかと思われる。しかし、40句「まつに深てのほしあやうき」は、桜井本は「まつに深てのほしあひやうき」であり、高岡本書写者（もしくは写したもとの本との校合を担当し比較した者）の閲覧した親本は「ひ」の脱落があったことがわかる。同様に54句も高岡本の「かきをとふ」の部分が桜井本「かれ野をとふ」であり、高岡本の親本と桜井本は相違する。全体として、桜井本との間には、十八箇所程度の校異があるが、「宗祇の研究」資料編（註）により、この百韻の他の伝本とも比較すると、桜井本と比した高岡本の独自本文は、諸伝本の間で校異が生じているとされる箇所と全く一致せず、一方その箇所の桜井本の本文は、他本と一致する。40句、54句も、諸伝本は桜井本と一致する。ここから、高岡本の本文が桜井本系写本から離れ、独自に乱れていることがうかがえよう。

さらに、概略の文章に関しては、高岡本の独自本文部分は、「宗祇の研究」所載の諸伝本とは一致せず、しいていえば書陵部本と同じ箇所があるが、その場合桜井本も同様の校異を示している。高岡

本は、桜井本と緊密なつながりも有していることがわかる。

夢想百韻の部に関しては、以上のことにより、親本に存した不審本文があり、またおそらく独自の、意味の通らない本文が見られることも考慮した結果、広くみて高岡本は桜井本系統の本文の影響下にあり、さらに加えてそこから本文の乱れがあると結論できよう。

#### 《本式連歌の部》

明応五年（一四九八）正月九日、清水寺での「独吟何人百韻」である。この百韻には、桜井本、高岡本共に「へ」がついた句が見られる。桜井本には、句頭に庵点がついた句が十一句（百韻の番号でいえば、3・7・11・19・29・44・45・47・59・65・98）、句中に点（不審な文字の印か）のついた句が三句（1・2・82）ある。高岡本は、句頭の庵点が、七句（百韻の番号でいえば、3・7・11・44・45・47・59）あり、庵点のある句は、桜井本の庵点のついた句の一部である。句中の印はついていない。桜井本には、初折裏の開始句に「ウラ」、二折開始句に「二」、二折裏開始句に「二ウラ」、三折開始句に「三」、三折裏開始句に「三ウ」、四折開始句に「四」、四折裏開始句に「四ウ」と句頭に注があるが、高岡本にはない。庵点に関しては、厳正な書写態度であるならば、親本にあるものはずべて写すと考えられ、見落としてによる脱落にしては数の相違が大きく、高岡本は桜井本よりも庵点が少ない伝本を写したと推測しうる。

また、本文を比較した時に、桜井本は百韻に注記はないが、高岡本47句「へ猿さそふ岩のかりふし月落ちて」には、「猿さけふい」と注記がある。

高岡本本式連歌47句



桜井本の本文は「猿さけふ」であり、注記を本文と同筆とみると、高岡本が桜井本から写したものであれば、このように書かれないであらう。51句「あちきなくわすれし人ににせもせて」にも末尾に「不知」と注記があり、「にせ」の部分が意味不明であるために付けられたものと思われる。この部分、桜井本は「たえもせて」である。この百韻の他の伝本では、例えば静嘉堂文庫本、書陵部本（統群書類従480）、早大伊地知文庫本（請求記号S3000S30）は、両箇所はいずれも桜井本と一致する。これらを含め、本文は桜井本との間に、百韻全体で十六箇所校異を持つている。両本の相違する箇所を静嘉堂文庫連歌集書本、統群書本、伊地知本とも比較すると、夢想連歌の場合と違い、各伝本が異なる校異箇所と多く一致する。なかで、31句「おさまらん世をもしらぬはあはれにて」は、桜井本は「おさまらむ世をもしらぬは命にて」であった。この句は「命に

て」(桜井本、早大本)、「哀れにて」(群書本・静嘉堂文庫本)と、二系統に伝本が分かれるから、高岡本と桜井本の相違がはつきりする。また、54句「おもへはむかしけにも恋しき」(桜井本「おもへはむかしけにそ悲しき」)は、「けにそこひしき」(早大本)、「けふそかなしき」(静嘉堂文庫本)、「けふそ恋しき」(群書本)と、「恋しき」と「悲しき」に大別され、高岡・桜井本はやはり相違する。それ以外は、桜井本が他系統と一致し、高岡本が独自に変化している箇所も複数見られる。

### 三 まとめ

高岡本は、桜井本とその書写態度を比較した際に、漢字仮名のあて方の相違がはなはだしく、高岡本の親本は、桜井本の漢字仮名のあて方に全く束縛されない字面を持っている。さらに幾種類かの付注が小字で書きこまれており、それらからは、高岡本が参考にしてゐる「本」(もと)の本、「御本」、「イ」本の存在が浮かび上がってくる。

諸所に見られる「本ノことく」の頭注は、高岡本の書写者(もしくは親本との校合を担当した者)が、親本の不審箇所をそのままに写したことを注したものであり、桜井本との比較からわかるのは、

高岡本は、桜井本と直接書承関係にあるわけではないということである。しかし、桜井本にごく近い本文の親本を写しており、桜井本の伝承筆者に関して、桜井本を披見した者が記した情報を受け継いでいる。ここから、前田家が持っていた『宇良葉』(現桜井本)は、幾度か家臣に書写をさせる機会があり、その伝本を持つ家臣からさらに清水家の当主へと、書写されていったと考えるのが最もありそうな推定である。書写者を推測すれば、城宝・綿拔著『清水家沿革歴史資料』に見える第十代清水藤石工門梅頭は、「文学に興味多<sup>註</sup>」き人物であったようであるし、第十一代清水藤石工門知易は、安政三年(一八五七)五月に『今川了俊対愚息仲秋制詞条々他』(未見、清水家文書内)を写しているから、こうした文学の素養深い当主、その関係者も考えられよう。

この高岡本により、これまで全く不明であった『宇良葉』の伝来に関して新たな視野が広がる。前田家が連歌関係の蔵書を蓄積するにあたり関わりを持った場所から、前田家へ、一本とは限らず伝本が伝えられ、また前田家の力の及ぶ領内へ、外から、また前田家から、複数の『宇良葉』の伝本が伝わっていったのであろう。高岡本の存在が知られることにより、唯一の伝本ゆえに孤高の存在として仰ぎ見られていた桜井本を相対的な視点でとらえられる。未だ手をつけられていない感のある『宇良葉』の研究の推進力になることを

期待したい。

※高岡本の存在をご教示くださった綿抜豊昭氏と、本文中に挿入した写真の使用を許可してくださった高岡市立中央図書館に感謝申し上げます。

## 注

- (1) 深井一郎「宗祇連歌発句集宇良葉」(金沢大学教育学部紀要第8号(昭和三五・三))
- (2) 貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』(昭和五二・角川書店)
- (3) 城宝正治・綿抜豊昭『清水家沿革歴史資料』(一九九四・桂書房)
- (4) 中村健太郎「朝倉茂入の極印」(『若本書法五』(国学院大文学部書道研究室・二〇〇六・三))
- (5) 『至宝抄』は、『連歌貴重文献集成第十集』(昭和五七・勉誠社)による。『至宝抄』は刊本等で手に入れやすかったと思われる。
- (6) 引用は注(2)書による。
- (7) 伊藤伸江・奥田勲「春日左抛御前法楽独吟百韻」訳注

- (一) 付翻刻(愛知県立大学日本文化学部論集第9号・平成三〇・三)、「櫻井本『春日左抛御前法楽独吟百韻』訳注(三)」(愛知県立大学国際文化研究科論集(日本文化専攻編)第20号(平成三一・三))、「櫻井本『春日左抛御前法楽独吟百韻』訳注(四)」(愛知県立大学日本文化学部論集第10号(平成三一・三))の校異による。
  - (8) 江藤保定『宗祇の研究』(昭和四二・風間書房)。資料編所収翻刻の底本は、東大国文学研究室本、校異本は、彰考館本、静嘉堂文庫本、書陵部本、大阪天満宮文庫本である。
  - (9) 静嘉堂文庫本は『連歌百韻集』(昭和五〇・汲古書院)、書陵部本は統群書類従、早大本は、早大図書館IP伊地知鐵男文庫画像による。
  - (10) 注(3)資料による。
  - (11) 「高岡市立中央図書館所蔵デジタル古文獻資料目録レファレンス・カウンター用」(二〇〇五・四)による。
- 本論考並びに翻刻は、JSPS科研費[17K02121「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」]の助成を受けたものである。

高岡市立中央図書館本 『宇良葉』 翻刻

あつまつ侍<sup>つすま</sup>し時正月朔日独吟に

2 富士のねも年は越ける霞哉

草庵にして正月朔日に

3 若水のか、みやきのふ雪の影

初春の頃ある所にて

4 玉水に雪の春しる朝戸かな

東山に侍し年春の雪を見て

5 たか春そ雪の麓の朝かすみ

おなし心を

6 春きてそ雪をも峯のうす霞

正月九日子日成し時独吟に

7 ひかしけふ松のおもはん老の春

春の雪の心を

8 雪ならてみえぬや高ねあさ霞

9 うすくこきかすみは雪のすそ野哉

池田三郎五郎所にて

10 雪はれて春をうかへぬ水もなし

11 きえはをし春とはかすめ峯の雪

12 ふりそめしほとたにのこれ峯の雪

蒲生形部太輔館にて

高岡中央図書館本『宇良葉』本文の翻刻を示す。翻刻に際しては、底本のままに復元できるように努め、漢字・仮名のあて方のみならず、字の大きさ、字配り等にも配慮して翻刻している。すなわち、夢想連歌、本式連歌、少ないながら各部立中にも、一句の中にも空白部分がある句が見受けられるが、そうした空白は翻刻においても残した。また、小字での傍注、庵点（へ）も位置を示して記している。ただ、誤写の際、書き誤った字の上に再度書いてある箇所が存在するが、そうした場所は書き直しの字のみを翻刻した。句には通し番号を記し、百韻三種に関しては、百韻中での番号も示した。また丁付を句の下方に示した。一方、一句の本文に明らかに脱字など不審な点があると考えられる箇所には稿者によるルビ（ママ）を付した。例えば153句・174句のごとくである。部立や百韻の開始・終わりの部分に存する空白箇所は、（○行空白）のように記して、空きを示した。

春

立春の発句に

1 霞をもまたて春たつ宮古哉

13 下もえはまたむら草の春のかな

春の発句に

14 松の色はあるよりいつる春の哉

あつまに侍し時

15 なみに松いまひとしをの霞哉

箕面にて正月の頃侍し会に

16 川音は木すゑにかすむみ山哉

専順法眼坊にて侍し四季の千句

17 かすみさへ榎たつやまの夕かな

霞の心を

18 我たちてきるやうす物春霞

おなし心を伊勢山田にて

19 山もとの杉にむら立かすみ哉

おなし所にて霞を

20 霞さへひく山ふかき宮木かな

渡邊の天神にまいりて梅

のちるを見て

21 風に梅ちらぬ花とふにほひかな

むめを

22 風またて匂ひをちらせ梅の花

おさなき子をわかれ侍し

人の名号連哥せし時梅を

23 梅か香のかすみふきとけ朝嵐

24 むめさげはにほはぬ木ミの風もなし

25 おる梅にかへるたもとのにほひ哉

26 四方にふけ梅さく山の春の風

27 空にたくにほひかかすむ梅の花

飯沼丹後守許にて同し心を

28 梅か香に天の下風春なれや

あつまにて同し心を

29 かすむ江に梅さく苦のまかき哉

30 梅か香をふかは身にしめあさ嵐

31 木ミに梅花をならはす匂ひかな

草庵にして霞を

32 霞たつ遠山のみや宿の花

山崎津田新左衛門尉許にて

33 水はれて山かたかくるかすみ哉

草庵にして霞を

34 打はへて世は春霞風もなし

渡辺にて春の比侍し会に

「三才

「二ウ

「三ウ

「四オ

「四ウ

35 あすも見ん松におほえの夕霞

和泉堺にて

36 かすめるやかくすみの江の浦の松

かすみを

37 遠山も今朝はめに立かすみ哉

將軍家の御会にまいるへきよし

侍りし時春日左抛明神に

立願したてまつるとて

38 朝なけにさしそふ春のひかり哉

播磨にて浦上美作守興行

の会に

39 梅さけは世はみな春の色香哉

春の発句の中に

40 梅かえにけさうちそへよ鳥の声

41 梅か香に山口しるし花の春

池田兵庫助所にて

42 梅いつくにははしすて、風もなし

43 梅か香をおきては露の柳哉

44 月に梅香こそといはん袖もなし

45 いつを見ん山をうす雪うす霞

46 鶯の羽風もあらし柳かな

47 うくひすやをるてふ声のあやは鳥

伊丹兵庫助住吉法楽の会に

48 雁もなけなみは花さく春の海

池田兵庫助正盛許にて

春の発句に

49 柳よりふきやならひし春の風

川原林六郎右衛門許にて柳を

50 門田ゆく山みつ深し柳かけ

和泉堺にておなし心を

51 かとことのみわたし遠き柳哉

山田下馬橋のあたりにて侍し会

52 駒とめてはしにかけけん柳かな

53 青柳は目に見えぬ風の姿哉

春の発句の中に

54 山霞柳にふかき川邊かな

55 水ぬるみ柳色つく川邊かな

東山にて柳を

56 しら川の木末ともなき柳かな

赤澤兵庫助の許にて侍し会に

「五ウ

「五オ

「六オ

「六ウ

「七オ

57 あさ露や柳か枝の色香かな

ある人不例の時千句し侍しに

柳を

58 春をへて玉のをゆらく柳哉

伊丹筑前守許にて

59 さかせてと花も思わぬ柳かな

柳の発句に

60 若髪にかへるは雪のやなき哉

61 たえすくる春やをたまき古柳

千坂對馬守許にて春の

比の会に

62 春の友ちきりは柳さくらかな

春の月

63 春の色は見えてくもらぬ月もかな

64 朝ほらけ月にかすまぬ山もなし

65 有明に春の夜ふかし朝霞

清水法樂とて人の申侍し

に春の月を

66 月にけさ霞をおとせ滝の声

浦上伯耆守興行に

67 旅としもおもはぬはるの山路哉

春の発句に

68 先さけと都をやまつ山さくら

69 峯の雪きゆるなまちそ山さくら

花をまつ心

70 またて見は花やと山の山さくら

71 さかて先嵐をつくせ春の花

花の発句の中に

72 さくを見よみやこは花の山桜

海辺にて侍し会に

73 磯波の花にまたるな山さくら

杉美作入道許にて侍し会

74 風ふかぬ世になまたれそ春の花

花の発句の中に

75 さきさかすかすめは花の梢哉

同じ心を播磨にて人に

かはりて

76 春いく世松にあひ生の山桜

ある人法樂に花を

77 ひらけきぬ種や天地代々の花

「九ウ

「八ウ

「九オ

おなし花の発句の中に

78 雨はれて花に雲そふ夕日哉

79 さかぬまとおもふな花を春の空

浦上美作守千句し侍しに花を

80 をよふ色にる時もなし春の花

藤澤清浄光寺にはしめ

てまかりし時

81 春や雲入みちしろき今朝の月

もろともに老たる人せし会に花を

82 花にまた契りくちせぬ老木哉

春の発句に

83 人ことの身のなになれやはるの花

84 春雨に見ぬしら雲や山さくら

85 よるや雨花に露けきあさ霞

86 糸桜見れば花さくやなきかな

87 かけ匂へ花を雲井の夕月夜

88 時はいま花の世なれや風もなし

芳野の花見待し時

89 みよし野や外には花の山もなし

右京兆亭の千句に花を

90 よるも見よ戸さしせぬ世の春の花  
花発句に

91 一とせの風やいまふく花さかり

松尾神主亭にて

92 桜色の衣にしるき宮木かな

鶴岡八幡宮の神主許にて

93 もる人は花に老せぬ宮木哉

春の発句の中に

94 山みえてかすむや花の朝曇

95 まかふなよ雲こそほひ山桜

96 九重のと山も花の雲井哉

97 空に見つにほひは花の千里哉

98 にほひそふはなは見し世の千しを哉

99 かすめ花たつねは遠き山もなし

100 花にきてなを雲あちの深山哉

101 ふるさとにうらみん花の山ち哉

102 おりてたにいまうき花のかへさ哉

103 みるはかりいはれはおらし山さくら

104 桜かり山も宮古のゆき、かな

能因法師入あひの鐘にと

よみける寺に花見にまかりて

105 見れば見ぬはるさへくやし山桜

花見にと人のさそひし時

106 おもひやれとは、ひと木の春の花

107 おる人のかへるも花のしるへかな

108 花に心かへればかへるやまちかな

109 たひ人も花に身をなす山ち哉

110 花かほり水いさきよき深山かな

111 山さくらかすみも花の匂ひかな

112 花にまたおもふかたなきみやまかな

二条関白家の御会に当座に

113 かけ高き庭や雲井の山桜

ある人の亭にておなし心を

114 花を見は千代もへぬへき木陰哉

伊勢二見の浦にて花み侍し時

115 水にはふ入江ははなのふもと哉

伊勢にくたり侍しに小坂上に

てたれとなき人花を一枝心

指侍しをた、おほかたとおもひ

侍しに発句を所望し侍しかは

「十三才

116 おる枝やなかは心の春の花

書写の寺にのほり侍し時

117 かりそみん宮古ちかくは山さくら

花の発句の中に

118 桜色にそめぬ袖なき都哉

119 花さかりにほひはちらぬ袖もなし

120 すこしちれ色なき程の花盛

121 又や見ん花に朝露夕かすみ

122 ちるまてと見ぬ人やおる花盛

寺井伯耆入道宗功ともなひ

て花見にまかりしに飛鳥

井垂相うつまさにまいりあひ

やかて桂宮院の花のもとにして

勸盃なと侍し時彼御詠花

見んとた、おほかたにさそふとも

か、る木かけの友にあはめや

予に発句つかふまつるへき由

うり給りて

123 なげつやあらしけふは待みつ花さかり

花の発句の中に

「十三ウ

「十四ウ

「十四ウ

124 をそくとく咲てをくらせ春の花  
125 春をわか木末にくらせ桜花

夏の暮に森左衛門尉盛家許に  
て侍し会に

126 うつろふか花に見さりし夕霞

○是迄宗祇法師筆

127 ちれはさくと見るやおも影春の花

128 まちてちれ花にかこたん風もなし

129 ちる跡とおもはぬ花の都かな

坂本井上坊にして春の末

130 山やあらしはなの波たつ春の梅

上月遠江入道の亭にて  
至宝抄ニ海トアリ

131 おそくとき花は見のこす人もなし

水辺の落花を見て

132 くむはかり花よる風のみきは哉

同しあたりに会侍しに

133 青柳になみこす花のみきは哉

ひえの山より所望の発句に

134 さけはちり散もいく世の山さくら

ある人所望せし発句に

135 ちらはふけ花はかこたし春の風  
春の発句に

136 たかいへは風もよきけんおそさくら

137 春雨をしほはし花の名残かな

138 はるをみな花にくらせる木本哉

139 花ちれは秋の風まつ若葉哉

遅日を

140 なかき日はやま鳥のおのか、み哉

能勢源左衛門尉宿所千句に

141 鳥櫛にくらさぬ日なき春野哉

春の暮発句に

142 池すみて藤なみ清し岡の松

143 水ならぬ岩かきふちや春の波

江州日野牧にて

144 藤つ、しはなに岩ふむ山路哉

新善法寺にてつ、しの

さかりに会侍しに

145 岩つ、しいは、ことはの色もなし

暮春の心を

146 なこりあれや霞の夕春の暮

「十五ウ

「十五オ

「十六ウ

「十七オ

三月盡に

147 ちるかたにゆかはをしへよ花の春

(二行空白)

宇良葉

夏

夏の初めの会に

148 花やねにいまはとおもふほと、きす

種子嶋右兵衛尉京に

のほり侍し時

149 ちきりきや初時鳥遅 桜

郭公の発句の中に

150 ほととぎすこそを心の初音哉

武藏のみよし野にて

千句侍しに

151 よるとなけあさゆく雲の時鳥

徳田六郎左衛門尉許にて

152 声の色ははつ音やちしを時鳥

撰津国にてはつかの山を

こゆとして時鳥をき、て

153 時鳥なくはつかのやま路かな

ほと、きすの発句に

154 まつ人をしらすはか(マ)て郭公

155 いかてますことほりすてよ時鳥

156 おもふかたありともわくなほと、きす

157 人つてもなと一こゑそほと、きす

専順法眼なくなりてのち専存

法橋坊にて時鳥を

158 あかさりし古声うつせ郭公

近江にくたりし時湖辺にて

159 月そ舟夕わたりせよ郭公

海つらの旅ねに時鳥を

160 わたりせよ雲ある嶋や時鳥

同し心を

161 音をそへよ雲は八重山郭公

浦上美作守和泉掬

にて興行の会に

162 ねをそへて名をたかくせよ時鳥

163 時鳥なく音木たかき山ち哉

164 郭公かたればき、し声もなし

日野の牧に下侍し山たか

き所にて

165 鳥もなかぬ山とおもふなほと、きす

166 しるへせは山路ともなへほと、きす

新樹の心を

167 山あひの初しほしるき若葉哉

かきつはたを

168 かきつはた花に水行川辺哉

上杉相州亭の月次に同し心を

169 色そそふ露はしら洲の杜若

卯の花を

170 春草はうの花かきの外面哉

171 卯の花に月雪はみつ春もかな

卯月の比豊原寺にて侍し会

172 夏山はいらかはかりを木の間哉

大内京兆つき山の亭にして

此所のさまを発句にと所望侍しに

173 池はうみ木すへは夏の深山かな

榎並三郎左衛門尉許にて卯月

のころ

174 夏山（マ）の池は梢も鴨の青は哉

細川阿州五月はかりに千句

したまふ時

175 山やいま帰て初音郭公

題しらす

176 夏山はいと水におちて滝もなし

水鶏を

177 天の戸を月にまかする水鶏哉

夏の発句に

178 道のへにさけはやあふち花の友

豊原西芳院にてたち花を

179 たちはなにそなれて句へ軒の松

齋藤又四郎許にて同し心を

180 ひまかほる風やたち花玉すたれ

早苗の心を

181 うふる田に秋風いそけ岡の松

小早川美作守館にて同心を

182 若なへを色なる田子のもすそ哉

廣田社のあたりにて又同心を

183 大御田にぬさも取あへぬ早苗哉

下笠三郎兵衛尉秀忠興行

「二十ウ

「二十オ

「二十一オ

「二十一ウ

「二十二オ

184 うへのほる里はすそわの山田哉

神保能登守許にて侍し会に

185 花さかぬ竹にも ツホム 若は哉

住吉のあたりにて五月雨を

186 五月雨はいつくしほひのあさかかた

蒲生刑部大輔館にて

187 雲まよひあま風さむき五月哉

寺井伯耆入道宗功会にて

188 はなの香にあやめもわかぬ軒は哉

能勢源左衛門尉許にて同心を

189 こよひ敷あやめも旅のかりね哉

五月のころ平泉寺にして

190 ふしのみか五月を雪のしらね哉

伊勢山田にて神書の心を

191 多に見しほたるかけなき朝日哉

夏の発句の中に

192 はしちかく夏やあまちの夜半の月

専存法眼坊にて

193 明やすきころとやいてし夕月夜

越中国にて万葉の心を思ひて

194 なてしこに雪嶋みする真砂哉

夏の暮に

195 日をさへて秋をふきこせ松の風

越前府にて侍し千句に夏の

月を

196 ひかりそへ月を玉江の夕す、み

日向伊東民部太輔旅宿にて

197 月やけさなみにす、しき西の海

粟田口にて伊豫法印の

月次に夕立を

198 夕立にあわたつ山のなかれ哉

周防山口にして

199 夕立にみゆる草木の心かな

越中新川郡にて同し心を

200 夕立の新川なかつちまたかな

豊原寺にて

201 くもりきぬ風や夕立みねの松

二条関白家にて千句御

会侍し時

202 とる袖もうす物にほふ扇かな

「二十四ウ

「二十二ウ

「二十四オ

203 月をけさたもとにうつす扇哉  
204 秋またて扇にそよけ萩の声  
題しらす

205 立ましる世はみなあさのよもき哉  
はちすを

206 蓮葉に露くもりなきか、み哉

大田左衛門大夫入道灌せし会に

「二十五オ

207 はちす葉もみきはにうつむ匂ひ哉  
宇佐美加賀守家にて

208 江のうゑもにはふやはちす玉簾  
夏の発句に

209 セミのはも夕日におもき袂かな  
七尾信濃守林泉寺にて

所望ありし時

210 木々にひ、き雲にみなきる泉哉

「二十五ウ

おなし心を

211 かけにせく泉やあらし松の声

長尾信濃守家にて同心を

212 まつ風にくませて涼し石清水

河内国中根弥九郎重行許にて

213 ふきのほる川風涼し岡の松

西宮にておなしこ、ろを

214 名も涼しきよき渚の玉かしは

湯河安房守かたへつかはし侍

し独吟の発句に

215 かけ涼し猶木たか、れ小松原

納涼の心を

216 秋やくむ風もにしふけ朝す、み

蜷河修理進伊勢法楽の

千句に

217 もすそひく夕川涼し柳陰

おなし心を

218 露涼し風はひまある玉すたれ

三上弾正忠頼安許にて

219 糸ならてむすふや清水柳陰

220 いはをよりくたけて涼しさ、れ水

越中小津にて

221 雪になみかへりて涼し越の海

夏の暮に

222 ゆけはまた扇はかりの風もなし

「二十七オ

水無月に人の雨こひし侍し時

223 やとすほとふれや水なき月の雨

加賀国山川三河守許にて

氷室を

224 みこしちや宮古ちかくはひむろ山

おなし心を

「二十七ウ

225 水さむき山を氷室の名残かな

文屋康秀か末孫赤井

綱秀許にて同し心を

226 かけ涼しむへ山風の宿の松

御祓のこゝろを

227 八重雲もはらふか月を御祓川

連哥の稽古とて人の

千句し侍しに同し心を

「二十八オ

228 ことのはもこの輪をこへよ御祓川

こしちに侍し時

229 みそきしてけふそ越路のわたり海

230 御祓川あきやたちての朝清み

(四行空白)

「二十八ウ

宇良葉

秋

秋のはしめの発句に

231 ちるやいつ風も吹あへぬ一葉哉

232 ちらぬ木も一葉にちかき風かな

越後府にて人の万句し侍しに

233 数そは、一葉や秋のみなど舟

草庵の会に

234 ちらしてもなことの葉の古柳

和泉堺にて

235 ちるやこゝろ風はおきふく柳陰

萩の発句の中に

236 待ちてふけ夕を萩に朝あらし

237 松風もほにいつる秋を萩の声

羈中にて侍し会に

238 萩をやとの風も朝立山路かな

239 すへ葉こすかせ幾帰り庭の萩

240 小夜風も今朝や有明おきの声

初秋の発句に

241 桐の葉にまちいてん鳥や雁の声

香宗我部出羽守会に

「二十九ウ

「二十九オ

242 桐の葉に聞は色なき雨もなし

七夕発句に

243 今日のみや水もらぬちきり天の川

江州にくたりし時並木石

見守許にて

244 夕波に月や岩こすあまの川

上杉戸部亭にて

245 天川月さへあひにあふ世かな

住吉法樂に七夕を

246 ゆきあひの空やよひのま秋の星

247 天川おもへはふかきあふ瀬かな

248 ちりそめし一葉やほしのむかひ舟

河辺のやとりにて侍し会に

249 ほしを見しうき木かなみのふし柳

初秋の発句に

250 ふきむすへ露やはよその秋の風

藏集軒にて秋の初に

251 露ならぬみとりも琪の木末哉

文月はかりに坂巻出雲守許にて

252 秋かけて夕たつ雲やはつ時雨

紀伊国山口といふ所にて

253 あきとふく松風涼し夕月夜

越後府延命寺にて

254 涼しさは水よりふかし秋の空

浦上美作守京に侍し頃

255 庭にせけ名も堀川の秋の水

月のころ

256 露を見てそむるもまたぬ草木哉

初て武藏国に下侍し頃

257 むさし野はかや屋を花の舎り哉

萩を

258 露やおく風をなまちそ萩か花

西行法師宮城野、はきを

慈鎮和尚にたてまつりし

其種今残り侍るを草庵に

うつしをき侍しに花の

ころその国の人来りて会

侍しに

259 露けさや宿も宮城野はきか花

秋の発句の中に

「三十一オ

「三十ウ

「三十オ

「三十一ウ

「三十二オ

- 260 秋なかはをきにすきゆく嵐哉
- 261 雁そなく萩にそよくや天津風  
声をほに雁もけさなけ花す、き  
「三十二ウ
- 262 秋の日や袖にいるの、花す、き  
「三十二ウ
- 263 霧中の野水のおもしろき  
「三十二ウ
- 264 あさ霧のうす花す、き風もなし  
「三十二ウ
- 265 なみこさぬ水はおはなか末野かな  
「三十二ウ
- 266 虫もすめはなのみせゆふ草の庵  
「三十三オ
- 267 とふ人をけふや花の、秋の庵  
「三十三オ
- 268 年のうちのはなやあさかほ一盛  
「三十三オ
- 269 あきの色はかはるもひとつ草葉哉  
「三十三ウ
- 270 あさかほも長月かけよはなの露  
「三十三ウ
- 尼崎佐野弥五郎許にて

- 271 ふきかはす風やはま松庭の萩
- 272 鴈もなげをのかは山の夕月夜  
あつまにて秋の頃
- 273 とふ雁もしらぬ雲井や富士の嶽  
越中放生津に神保能登守宿所の会に  
「三十四オ
- 274 やとれ月今朝秋風のなこの海  
遊佐弥九郎館にて千句に  
「三十四オ
- 275 戸さしせぬ世には月見ぬ里もなし  
月の発句に
- 276 影うすしかつらや木のま空の月  
八月十五日
- 277 草も木も月まつ露の夕かな  
名月の発句に
- 278 心ありて月見は秋の今宵哉  
長尾三河守舎りにて  
「三十四ウ
- 279 のこる身を月にかこたぬ今宵哉  
おなし心を
- 280 一とせのかけや今宵によるの月  
名月の夜只ひとり月を見て

281 秋こそと見し夜や今宵秋の月

282 名やおもふこよひくもらぬ秋の月

十五夜の月蝕にあたりし秋

283 名をはえつ今宵はくもれ秋の月

月を

284 しろたへのひかりや月のあまつ袖

遊佐弥九郎館の千句に

285 いつよりとおもふやひかり秋の月

おなし心を

286 久かたの山いかはかりそらの月

をはすての月見侍しに

小林といふものみち遠く

むかへにきたり侍しそれか宿にて

287 雲霧をわけしも月の山ち哉

月を

288 今朝見よと待にやふけし夜の月

伏待の月を

289 今宵とてねてやはまたん秋の月

土肥与四郎長侶許にてはつ

かの月を

「三十五オ

「三十五ウ

「三十六オ

290 名もしるき廿日の月の雲間哉

おなし心を

291 あさ霧に月は夜わたる川辺哉

292 うす霧の月や春の夜朝ほらけ

宇治にて秋の暮に人の

所望の発句に

293 かけや雪山をか、みの秋の月

野分の発句の中に

294 花に見む頃や野分の朝しめり

295 花になをおほふ袖なき野分哉

296 うすくこきちるは野分の下葉哉

豊原寺にておなし心を

297 むら雲にまよふや野分峯の松

298 ゆくあらしかへるを待つくのくすは哉

周防に侍し頃秋の発句に

299 涼しとてなれしはあさし秋の水

越後関の山に水おもし

ろき坊にて

300 水にすむ心やみ山あきの庭

上野国赤井綱秀許にて千句に

「三十六ウ

「三十七オ

301 花鳥はうらみん秋の夕かな

題しらす

「三十七ウ

302 雁かねも霜に色こきいなは哉

筑波山にのほり侍しにそ

の寺にて

303 山たかみ雲をすのは秋田哉

筑前隼人のわたりにて

304 舟にみえてきりもせとこす嵐哉

丹波神尾寺にくたりし時

山路の心を

305 雲に雁谷にをしなく山ちかな

秋の発句の中に

306 松の色はあらしをあきの千しを哉

307 うすくこくそめよ木末の秋の露

308 松の色も秋にはあへぬ下葉哉

富士松の紅葉したるを見て

309 松ひとりふしに時しる紅葉かな

吾妻にて海つらおもしろき

わたりにて

310 まつのはや秋の千しほの遠ひかた

「三十八ウ

上杉相州の亭にて

311 風もねよ夕露のこるあさかしは

312 もみちせはいつれ深山の木々の露

313 染てまつ心や木々の初時雨

武田豆州の亭の月次に

314 初雁のこゑやした染木々の秋

浦上美作守有馬の湯に入

侍し時

315 槇の葉はそのを色を秋の時雨哉

つくしへ下り時菊の高浜

をすくとて舟中に

316 花ならぬまさこも菊の浜ちかな

菊の発句の中に

317 菊にいつをきそめし露そ谷の水

318 きくさけは野はうつろはぬ花もなし

319 花のへんしも星とをし秋のきく

日光山くろ髪山はむかし

仙家にて侍しよしき、侍りて

320 くろ髪に世をへし山やきくの陰

題しらす

「三十九ウ

「三十九オ

321 峯越てきくに雁なく山路哉

十三夜に三井寺にて

「四十オ

322 こよひ月あかつきをまつ秋もかな

豊原大染院にて同し心を

323 名をえてはみちぬや心秋の月

紅葉の発句の中に

324 色をさへかるやもみちの露の宿

幣の字カ本ノことク

325 とりもあへぬ弊は嵐のもみち哉

326 千しをとや露はそめけんうす楥

327 露やしるいつれ明日のうすもみち

秋の発句に

「四十ウ

328 夕みし山や下染あさもみち

楥の発句中に

329 やまひめのおもはぬまたか薄もみち

山にて一念三千の心を

紅葉によせて

330 千さの色になるも一木の心かな

龍田を初て見侍しときわか

きをのこふたりありていつれ

も発句所望し侍り時当座

「四十一オ

331 山や雨からくれなゐの秋の水

いまひとりの若衆のために

332 山のはやあまつ嵐の下紅葉

あつまにて九月盡に

333 ぬきをくか秋はゆく野、から錦

(一行空白)

宇羅葉

冬

十月一日の会に

334 そめし山ありとも今日や初時雨

初冬の心を

335 めくりきて影もしくる、月日哉

残さくの心を

336 さきそぞふ秋なき時も秋の菊

時雨を

337 雨いつれ風はしくれぬ山もなし

下京石川入道許にて

338 しくれにも宿はのとけき宮古哉

千句に

339 夕時雨めくらはさ夜のまくら哉

「四十一ウ

「四十二オ

筑前国芦屋の里にや

とり侍し時

「四十二ウ

340 いつきかむ芦やの月の夕時雨

難波にて折ふしの云捨に

341 松風にかねもしくる、夕かな

遊行上人ひたちにおはしまし

ける頃はるなる嶺をしのきま

いり侍しその時の会に

342 袖に見よ時雨につれし山めぐり

箱崎神主の家にて

「四十三オ

343 松の葉におなしよをふる時雨哉

やすらはまほしき所にて一

座侍し時雨を

344 過かたき時雨を宿のかこと哉

日光山一見の時中善寺

にておなし心を

345 しくるなと雲に宿かるたかね哉

346 いたつらに松もしくれぬみとり哉

347 しくれきやさ夜のあらしの朝曇

森左衛門尉家許にて侍りし会に

「四十三ウ

348 あさかしはねぬ夜しくる、軒は哉

入江左京亮宿所にて

349 まちてちれ又や時雨のうすもみち

草庵にて侍し会に

350 木葉もる軒はかこたん雨もなし

落はの心を

「四十四オ

351 花をさへわすれぬ風の木のは哉

352 まつちるは心のかろき木のは哉

池田若狭守許にて侍し会に

353 あさ霜の木の葉におもき風かな

高雄にて神無月の頃

354 あらしにもまかせぬ滝の落は哉

355 それとなく木はうつもる、落は哉

356 色ふかき木の葉の庭はちりもなし

「四十四ウ

357 ふきすてよ落はを庭の朝風

358 おちはせし木すへにつもる嵐かな

新田礼部の亭にて同し心

359 雨とのみちりしもしるきくちは哉

長尾下総守興行に

360 せく水を氷にゆつるくち葉哉

中嶋二郎左衛門尉月次に

361 色くつる野や山ひめのでて衣

冬の発句に

「四十五才

362 花かたみめかれぬ霜の木草かな

363 こからしにふきはつる花の嵐哉

木枯の心を

○是迄宗哲筆

364 木からしにふくや下葉の松のかせ

白川の関見侍し時修理大夫

入道亭にて

365 木枯におもふ都の青葉哉

おなし所にて侍し会に

「四十五才

366 山越る時雨もたひの雲路哉

かくて同行みな此関をた

ちわかれかへり侍しに又いつ

かはなとみな人すきかてに

して予に発句つかうまつる

へきよし侍しかは

367 袖にみな時雨をせきの山路哉

冬の発句の中に

「四十六才

368 そめくく木枯になるしくれかな

369 秋を、きて露はかれ野、朝かな

尼崎釈尊寺にて

370 神無月うへはつれなき松もなし

371 をきそふか猶あらはる、霜の松

372 深山水を冬は心のかさしかな

西芳寺にてある夜人々とも

なひて舟にて月見などし

侍し時

「四十六才

373 水さえて月も岩もる木のまかな

おなし心を

374 氷行月は水なき空もなし

375 よるや月あとも氷の朝か、み

376 かけならぬ氷も清し月の庭

377 月うすしくもる枯野、朝しめり

378 あさほらけ時雨にめくる月も哉

能勢源左衛門尉千句に冬の月を

379 さえのほる月は千里のたかね哉

冬の発句に

380 空にたかくたく氷そ玉あられ

381 よるや雨水なき庭の朝氷

「四十七才

382 薄氷とり見まほしき鏡かな

383 友と見はこほらぬ水の心かな

384 川音は霜にこほらぬ深山哉

385 池田若狭守やとりにて

386 霜あさの月に田鶴なく雲井哉

387 声とけて鳥なく霜の朝日哉

388 冬の色をいつとなくやは嶺の松

389 初雪に松の葉をしむ嵐哉

390 神無月に大内京兆の月次

391 発句すへきよし侍し夜俄に

392 雪のふりけるを明かたに思案の

393 発句さためて

394 今朝見るや嵐にき、し夜るの雪

395 雪をまつ心を

396 雪をまつ心を

397 雪をまつ心を

398 雪をまつ心を

399 雪をまつ心を

400 雪をまつ心を

401 雪をまつ心を

雪の初て降侍し時の会に

392 さらにた、花の雪ちる木すへ哉

393 いまいくか山のはに見む庭の雪

394 堀川わたり妙満寺にて侍し会に

395 山は雪いくへみきはのうす氷

396 雪はれて鳥の音たかき木末哉

397 のこる雪かれの、す、き峯の松

398 こほれ雪松にいとほん風もなし

399 ふけあらしうつまは松の雪もなし

400 吾妻にくたりし時宇津宮

401 下野守館にて

402 池はれて山水さむし雪の陰

403 武田光祿東山に峰高き

404 所の城にて侍し会に

405 甲斐かねをこすや宮古の雪の山

406 出羽国の人連哥の心さし

407 ふかくて数日をへて越後

408 まて尋侍し其人せし会に

409 袖の雪にふかき程しる山ちかな

410 あつまに浦山かけて景を

「四十八オ

「四十九ウ

「四十九オ

もしろき渡りにて侍し会に

「五十一オ

402 山かけて舟よる雪の木のま哉

伊丹兵庫助宿所にて雪の発句に

403 いかにくあらしそ雪の村かしは

持是院にていなはの山にか、  
是本ノことク

みのいわれあるよしをき、侍り

て其会に

404 雪はる、やまはちりなきか、み哉

若狭小浜にて侍し会に

405 ふりのほれ山松ちかき波の雪

406 とを山の雪にもなひけ窓の竹

西国よりしる人千句すへきの

よしありて所望侍し時

407 箱寄の明ほのいかに雪の松

題しらす

408 霜をへは雪にもいくよそなれ松

草庵の会に述懐の心を

409 雪たにも山ふかくなせ宿の松

摂州兵庫よりある人所望

し侍し時

410 雪やなみ松の葉こしのわたの原

鈴木長敏か許に尋ぬへき

ほとすきて雪ふりし頃まかりて

411 今日見るや心にわけし宿の雪

春まつ心を

412 はなは雪かすみをおもふ木末かな

413 なかめつ、ことしも雪の梢かな

神祇の発句に

414 霜ふけて星の声すむ雲井哉

早梅の心を

415 雪に梅春をとをしの古枝哉

416 さきてまてはるやいそかん梅の花

草庵にて早梅を

417 人または冬そさかまし宿の梅

年内の立春の心を

418 猶またはたつやうらみんけふの春

歳暮の心を

419 行年に春日はかりの暮もかな

420 空に見よ月日はくる、年もなし

421 世は春にうつるもおしき今年かな

「五十二ウ

武田光祿亭にて極月の末

422 雪や梅この花さかぬ木さもなし

(六行空白)

「五十三才

明応九年予やそちにみちて

会席の交りと、め侍るうへ

に猶さるかたき事侍りて

つかうまつれる発句正月二日

草庵にして

423 わきて見は山やたか春朝かすみ

八幡於梅坊

424 梅はた、匂ひを花のちしをかな

能勢源左衛門尉許にて

425 染はいつ山はかすみの朝みとり

426 またてみよ花やはとをき木さの雪

景瑞庵にして俄に会侍しに

427 にほへなを初花染のうすかすみ

摂州上宮の月次に人かはりて

428 みやま木や春の色程花さかり

池田兵庫助宿にて

「五十四才

429 雲鳥もはなに開いつるみ山かな

伊丹大和守宿所にて

430 去年みしやうす花さくら春の色

丹波国南昌庵に参上の時に長老の御発句

431 雨はれて花の雲あるたかね哉

翌日に

432 花に入やまは心のはてもなし

河内国出口東呉庵にして

433 はなをちて名残かうはし春の草

湯山にて浦上美作守興行に

434 ちれはさきぬくるとも幾世花の春

山崎津田新左衛門尉許にて

435 竹の葉も若苗なひく門田哉

蒲生刑部太輔館にて

436 夕立や越えし岩なみあまの川

(七行空白)

春日左抛御前法楽

何路

437 (1) 朝なけにさしそふ春のひかりかな

「五十五才

「五十五才

「五十四才

- 438 (2) むめうちかほり雪とくるころ  
 439 (3) 山もとの川そひ柳風ふきて  
 440 (4) むかひの村に舟わたるみゆ  
 441 (5) 人さわくかりねの月や明ぬらん  
 442 (6) 道ゆきふりにはらふしら露  
 443 (7) かたはらにこ萩しほる、野へにきて  
 444 (8) むしの声きく日はくれにけり  
 445 (9) 山かけや風もとまらぬ草の戸に  
 446 (10) つもらむ程そ雪に見えたり  
 447 (11) 年はまた若木の松のかたふきて  
 448 (12) わかよわひこそおもひしらるれ  
 449 (13) 末とをくむかし契りし人もなし  
 450 (14) あたなるものを何たのみけん  
 451 (15) なる、まは風まつ雲のわかれちに  
 452 (16) 月もたひなるあかつきのやま  
 453 (17) 天つ雁よるのたかねに声わひて  
 454 (18) 時雨にうつるあきのさむけさ  
 455 (19) 露さへや我すむ里をあらすらん  
 456 (20) おもひなおきそうき世なりけり  
 457 (21) ちらすとも見はてん花はなき物を

「五十六オ

「五十六ウ

「五十七オ

- 458 (22) いささくらとや風はふくらん  
 459 (23) なく鳥の心もしらす春くれて  
 460 (24) かすみを野へにわくるかり人  
 461 (25) なすつみのみちにはなとかまよふらん  
 462 (26) とをしと後の世な おもひそ  
 463 (27) 行末の老をはまたしわかいのち  
 464 (28) かへさやすらへかたるふるさと  
 465 (29) たのむ夜にまた深はてぬ月を見て  
 466 (30) とふやときけは秋風そふく  
 467 (31) 花す、き君かうへしをしをふらん  
 468 (32) おのへの宮のあとのかなしさ  
 469 (33) 山ふかき雪を鹿のみふみわけて  
 470 (34) 夕の雲のをちの旅人  
 471 (35) みやこそかへる見てもこひしけれ  
 472 (36) つらき三年をおくるしま国  
 473 (37) あまの子のおやの別もいかはかり  
 474 (38) あわれにけふるしをかまのうら  
 475 (39) 水さむき川原に秋の日は暮て  
 476 (40) ひさきうちちるかたやまのかけ  
 477 (41) 霧のほる木末の風や渡るらん

「五十七ウ

「五十八オ

- 478 (42) 野中の里の月もすさまじ  
 479 (43) 狐なくあたりに草の枕して  
 480 (44) たゝつかの間の夢をたに見す  
 481 (45) たかをくるこの一筆そおほつかな  
 482 (46) とはしとこそはわれもいひつれ  
 483 (47) 花になと去年の嵐をわするらん  
 484 (48) 春の若もた、秋のやま  
 485 (49) 露かすむ柴の庵の夕くれに  
 486 (50) 月にやこけの袖もしほらん  
 487 (51) 捨し身は猶永夜にね覚して  
 488 (52) きりにも後のやみそかなしき  
 489 (53) こひしなはおもひもつきねむねの中  
 490 (54) 人のつれなき世をもうらみし  
 491 (55) 数ならて情をみむもいかならん  
 492 (56) 都のつてにかゝる山里  
 493 (57) たつねよと花にやまよふ峯の雲  
 494 (58) ほのくかすむあけかたの空  
 495 (59) さえしよの月に春風また吹て  
 496 (60) ふねを出せは雪そはるけき  
 497 (61) ふしなれし竹のとまりの朝またき

「五十八ウ

「五十九オ

「五十九ウ

- 498 (62) 羽をならへつる鳥もいにけり  
 499 (63) 契りてや常ならぬみちをわするらん  
 500 (64) 神なる雨にかよふ夕くれ  
 501 (65) よそめにはおもふ中とやいはれまし  
 502 (66) ひとりくねぬる夜の床  
 503 (67) ゆきつれし人はいつくのかり枕  
 504 (68) とは、や月にこゆるおく山  
 505 (69) 秋ことの其あらまは道もなし  
 506 (70) 花を心にわくるみやき野  
 507 (71) しけりあふ木の下露に袖ぬれて  
 508 (72) むすひもあかぬ水の涼しさ  
 509 (73) 住なれて身もしつか成みねの寺  
 510 (74) 夜ふかきかねそ涙もよほす  
 511 (75) なく鳥を空音になせはこゑはひて  
 512 (76) と、めかたきはわかれ行人  
 513 (77) かきりある道ならばなとむまるらん  
 514 (78) 水もかへらす火もきえにけり  
 515 (79) かきためしもくつを波の又引て  
 516 (80) きよきなきさに残る松風  
 517 (81) 月しろき雲をたつやしたふらん

「六十オ

「六十ウ

- 518 (82) まくらのうへはた、秋の霜  
 519 (83) しく袖の露もたまらず野は枯て  
 520 (84) あさゆく道はさ、そよくおと  
 521 (85) とふもうし此の一ふしに名やた、ん  
 522 (86) なれすは何を身におもはまし  
 523 (87) 面影もよしさは今はとまるなよ  
 524 (88) か、みに年そうつりもてゆく  
 525 (89) 山鳥のおろのはつ雪ふり添て  
 526 (90) へたつる峯もしるきうき雲  
 527 (91) 三笠なる宮居にひとし鹿鳥かた  
 528 (92) 神やあまたにかけむかふらん  
 529 (93) ねかふてふ心は人にさたまらて  
 530 (94) 身そいにしへにあらすなり行  
 531 (95) 老木さへ花はおもひやなかるらん  
 532 (96) おほうち山の風ののとけさ  
 533 (97) しら雲に春のふもとの夜は明て  
 534 (98) 舟こく海に月おつるかけ  
 535 (99) わすれめや此のすみの江の秋の暮  
 536 (100) なを手向をけ露の言の葉

「六十一オ

「六十一ウ

「六十二オ

此百韻ハ將軍家の御会に初て

めしくわへられ侍し時 春秋 五十五歳 春日の末

社左抛の御前に祈念の事有て

彼御社の名を発句の中にかくし  
 て手向侍しを程へて後独吟

の功を三時に終侍しもおほよそ  
 この神にいのり申事いさ、か

其よし有事になん

「六十二ウ

いにし年の冬つかた雪あられひま  
 なき頃月のかけ星のひかりもた

とく敷夜ふかき松のひ、きさへな  
 こやかならぬあさのふすまさへとをり  
 明行かけのよもきのまろねは夢

のかよひもたえはつる頃いかにねし  
 夜かなと云やうにさまことなる人発句  
 をうちすんすると見えてめさめぬ

「六十三オ

すなはち下句をつけ侍しをおもへは  
 はかなしや此道にふるくものかゝる

夢みるはつねの事とおもひな  
 からもさすかにさし置かたく侍れと

近き年頃は世のうきふしもかきり

なきにうちそへみたり風いと、し

く言のは草色おとろへ心のたね

もくちはてぬれはおもひつ、けん

も物うくて過行程に年くれ春

かへりあきさへ半過ぬれよわひす

てにいにしへもまれなる年にあ

たりよるくのね覚心ほそくて

萩の音雁のなみたにもよほさる、

袖のうへやらんかたなした、おもふ

事としてはこん世のたひのいそぎ

なりさるはいま一たひ神にまかり

申もせまほしきを手向の物又なに

ことをかいと心のぬさのとりあへす

こしかたの二句につ、りそへて

まよはん道のしるへにもとおもふ

心しかなり

夢想之連歌

537 (1) 住吉の松こそみちのしるへなれ

538 (2) とを里をの、雪のかへるさ 宗祇

539 (3) 舟よする浜辺の真砂月さして

「六十三才

「六十四才

「六十四才

540 (4) 声もむら／＼千鳥なく也

541 (5) 我門のいなは色付ふく風に

542 (6) かきほをあらみす、きちる頃

543 (7) くれふかき露のかよひち跡たえて

544 (8) いくゑの霜ぞ見るもすさまじ

545 (9) 遠近のかねに目覚て出る夜に

546 (10) しつまるやとり人やねぬらん

547 (11) たれとなく涼しき月に声更て

548 (12) 水にそやまのこ、ちをもしる

549 (13) 風はのみ花はうらみし吉野川

550 (14) はやくもかはるふる里の春

551 (15) つれてこしちきるも雁の別ちに

552 (16) うかへる雲の世をはたまし

553 (17) 道ならぬ身はわひぬるもつらからて

554 (18) よしふかぬともかゝるよもきふ

555 (19) うつろへは露こそ月のみやこなれ

556 (20) 秋のやまにや旅のわすれん

557 (21) なく鹿に我つま恋ひをなくさめて

558 (22) あはさらめやのゆふへたにうし

559 (23) さのみやはたのめし事のあたらん

「六十五才

「六十五才

- 560 (24) うらみし心みえもこそすれ  
 561 (25) たへねた、おもふにかなふ人もなし  
 562 (26) やすけなる身もよそ目成けり  
 563 (27) 水を友山をとりの草の庵  
 564 (28) 夜ふかき霜に川風そふく  
 565 (29) たつをしの跡をうきねの声侘て  
 566 (30) ひとりや月の行衛をもみん  
 567 (31) わかさらむ秋の空かはまてしはし  
 568 (32) いさやいのちの後の夕露  
 569 (33) 草の原名残りわずれん人も哉  
 570 (34) さくらうちちり里そふり行  
 571 (35) たちなれしかりはのかた野春暮て  
 572 (36) ありかやいつちき、すなく声  
 573 (37) 雪なからかすむ外山の朝ことに  
 574 (38) 伊吹おろしそなみにのこれり  
 575 (39) 舟わたす夜中に月はかたふきて  
 576 (40) まつに深てのほしあやうき  
 577 (41) あきをちきり暮をたのむもいたつらに  
 578 (42) 猶いつまでのおもひならまし  
 579 (43) かりの身をはしめなき世に請初て

「六十六オ

「六十六ウ

「六十七オ

- 580 (44) 誰をうらやみ誰をくた さん  
 581 (45) さかぬ木も時しる花の一さかり  
 582 (46) 山はみとりの春ふかき色  
 583 (47) 霞こくあまのつり舟遠き江に  
 584 (48) はまなのはしをた、にやはみん  
 585 (49) すみわたる月にいそくな天津雁  
 586 (50) 小萩うつろふいねかてのさと  
 587 (51) しほるなよ身に今よるの秋の風  
 588 (52) 夕越くれは山そかさなる  
 589 (53) ふりそむる朝の雪に駒なへて  
 590 (54) かきをとふはた、宮古人  
 591 (55) やふしわかすもとめは梅や花もみん  
 592 (56) あせたるむらの春さむきかけ  
 593 (57) ひまかこふ軒はのかすみ衣かせ  
 594 (58) 山にも身こそかくしわひぬれ  
 595 (59) おもひ立ひとへ心の世をいてて  
 596 (60) あさきをきくも法ならずやは  
 597 (61) わたれひと舟まつ程の水もなし  
 598 (62) はる、もいてぬさみれの 宿  
 599 (63) 月にうき雲のいつこにふけぬらん

「六十七ウ

「六十八オ

- 600 (64) 夜はひや、かにほたるとふ空  
 601 (65) 萩に風いわぬおもひのこたへして  
 602 (66) 夕本々のしらはいかにしのはん  
 603 (67) 待うかれ我やゆかぬの道のへに  
 604 (68) 見えはや人もこゝろなるらし  
 605 (69) 山里の花をかへさに折はへて  
 606 (70) たつねよまたもなきさくらかは  
 607 (71) たゝになどあたら春日を盡らん  
 608 (72) ねさめする夜のうつるたにおし  
 609 (73) 音きけはよその時雨を枕にて  
 610 (74) くもらぬ月に物なおもひそ  
 611 (75) あらさすは宿にやはすむ野への秋  
 612 (76) むしのいろく乱てそなく  
 613 (77) 待いつる風のとたへに露置て  
 614 (78) しほれもやまし小舟さす袖  
 615 (79) をりたつをおもへあしかるわさなれや  
 616 (80) こひちにいかてたかふこゝろそ  
 617 (81) 世やはうき誰うらめしき人ならむ  
 618 (82) おひをなせめそかゝらさらめや  
 619 (83) 秋は時雨冬は霜夜にふしわひて

「六十八ウ

「六十九オ

「六十九ウ

- 620 (84) 木の葉ふり行あかつきの庵  
 621 (85) かけさひし嵐や月に残るらん  
 622 (86) 山さむけにも松むしそなく  
 623 (87) よるかたもあらしすみかに秋かけて  
 624 (88) 人の心の見ゆる夕 くれ  
 625 (89) よむ哥やなき身のうきを種ならん  
 626 (90) おもひをのへは物ことにあり  
 627 (91) さく花のかたはら遠く霞む野に  
 628 (92) はやしをしめてすめるのとけさ  
 629 (93) きかし只春はいくかのかねの音  
 630 (94) ひかりもかけもけにそはかなき  
 631 (95) ともしするかた山川の鶉かひ舟  
 632 (96) 水よりはやしあくる夏の夜  
 633 (97) さゝ波やこへくしのにおりはへて  
 634 (98) 初風たちぬ柳ちる 陰  
 635 (99) 露みたれ日くらしなきて残る日に  
 636 (100) 身にしむ色はたゝ秋の空  
 (二) 行空白

「七十オ

「七十ウ

本式連歌

何人

- 637 (1) ひかし今日松のおもはむ老の春  
 「七十一オ
- 638 (2) むめかほる野、わかなつむ頃
- 639 (3) へ山きはの沢水とをく雪消て
- 640 (4) くる、やけふりむかひなる 里
- 641 (5) たかすむを我やとりいそくらん
- 642 (6) 心のあるは旅にみまほし
- 643 (7) へをはすてやかりねの月になくさめて
- 644 (8) ころもうつよの風なしほりそ
- 645 (9) あまもやは浪のまくらはやすからん  
 「七十一ウ
- 646 (10) あしへにかもの霜はらふこゑ
- 647 (11) へしつかなるなかれをさむみ日は暮て  
ウラ
- 648 (12) うかへる雲のそらのはかなさ
- 649 (13) ゆきとまるかきりは誰もしらぬ身に
- 650 (14) とをくちきるな年月のすゑ
- 651 (15) いまこんをきかはをそきをいか、せん
- 652 (16) ゆかりにさへそおもひうかる、  
 「七十二オ
- 653 (17) 花ちらす風はよはるもうき物を
- 654 (18) 山はかすみにかねひ、く音
- 655 (19) はるかなる峯のともしひ影深て
- 656 (20) 月はたれにかこ、ろすむらん

- 657 (21) 秋をあきとしれるはかりはおほきよに
- 658 (22) ゆふへをわくるた、おきの声
- 659 (23) たのめをく露の道しは跡もなし
- 660 (24) われやはかれん人はうくとも
- 661 (25) 友はみなよからんこそはちきりなれ  
 「七十二ウ
- 662 (26) とすれはさはくこのうちの鳥
- 663 (27) 雲風に春は心のさそはれて
- 664 (28) こえぬ山なき花のあらまし
- 665 (29) みよし野を我ふる里といつかみん
- 666 (30) みやこもうき身へかたくそなる
- 667 (31) おさまらん世をもしらぬはあはれにて
- 668 (32) いくさの場もた、秋の露
- 669 (33) 風わたるよもきか月のしろき野に  
 「七十三オ
- 670 (34) 虫の音たかくさよふくる空
- 671 (35) うらみやはこたへは人のわかさらん
- 672 (36) おもひしらすはこひもしなはや
- 673 (37) いたつらになさむもいまはつらからて
- 674 (38) あさまのけふりむねにのこさし
- 675 (39) ニウいつくにかみるめもゆかん不二の嶽
- 676 (40) きえしまもなくつもる初雪

- 677 (41) 吹かわりたゆめは風のまたさへて  
 678 (42) 冬をかなしむわひ人の庵  
 679 (43) はるになをあふとも我身いかならん  
 680 (44) へなれこし花そとしにすくなき  
 681 (45) へみとりそふ木はた、苔を色なれや  
 682 (46) 水ゆく山のあきふかきころ  
 683 (47) へ猿さげみさそふ岩のかりふし月落て  
 684 (48) 夜はあけわたる霜のかけはし  
 685 (49) 跡とめぬ夢とや雲もわかるらん  
 686 (50) たつはなに其をも影ぞうき  
 687 (51) あちきなくわすれし人ににせもせて不知  
 688 (52) たかわひさするゆふへなるらん  
 689 (53) ふる里にきてはうちなく時鳥  
 690 (54) おもへはむかしけにも恋しき  
 691 (55) か、れとはいさめさりつる身を捨て  
 692 (56) 心をたにもむなしくやせむ  
 693 (57) 春をへて花はうらみむあさちふに  
 694 (58) わかやとからの月なかけみそ  
 695 (59) へ袖こゆるなみに一夜をあかしかた  
 696 (60) 友とやきかむ千鳥なくなり

「七十三ウ

「七十四オ

「七十四ウ

- 697 (61) 山かけの雪のかへさに舟さして  
 698 (62) 雲さへさひしくれふかきそら  
 699 (63) 秋としもいはれぬや身のうきならん  
 700 (64) わか露けさは草木にもみす  
 701 (65) 風つゝ、きまくらの野へを今朝分て  
 702 (66) 夢もや旅の道まとふらん  
 703 (67) ゆくはさそおもひやるたにうつつの山  
 704 (68) 関はありとも心へたつ な  
 705 (69) くるしとはなけかさるへき人めかは  
 706 (70) ことなくてこそはてまほしけれ  
 707 (71) ほと又此あらしよはひのうちもいかならん  
 708 (72) かたふく月のす糸のむら雲  
 709 (73) 初時雨しくれもあへす秋深み  
 710 (74) またうすもみちかつそちり行  
 711 (75) 野分たつ頃より山もあはれ也  
 712 (76) きりさむけなる川つらのさと  
 713 (77) 渡し守たれにまたれていそくらん  
 714 (78) 身をつくすとも人はおもはし  
 715 (79) 恋せよとなりこし世かはうらむなよ  
 716 (80) 心とみちはふみそまよへる

「七十五オ

「七十五ウ

「七十五ウ

717 (81) 雪の夜のゆふつけ鳥の山越て  
「七十六オ

718 (82) あくるもふかし爪木たてるかけ

(四行空白)

宗祇判

「七十七ウ

719 (83) 滝なみに夢は幾度帰るらん

720 (84) おもひしつめぬかせの下庵

721 (85) いとへとも身はた、ちりの内にして

722 (86) 心ならても世をやつくさん

723 (87) たまのをのたゆるをまてはあやにくに

724 (88) きえぬものからあたし野、露

725 (89) 花す、きなひくはかりに風みえて

「七十六ウ

726 (90) 月にほのきく初かりの声

727 (91) ねさめせぬ人はあわれをいつしらん

728 (92) うきをわかすは心なら めや

729 (93) とへかしの雨うちかすむ窓のまへ

730 (94) おもひくらせるやまさとの春

731 (95) た、いまを見よとや花はしほるらん

732 (96) 野辺はさかりの秋風のころ

733 (97) かり衣こたか手にすへ露分て

「七十七オ

734 (98) あさふむみちに駒そいはふる

735 (99) うち出です、しくむかふ瀬を広み

736 (100) すめるや幾世清き 山水